

曲直瀬道三の前半期の医学 (一)

—「当流」の意義—

遠藤次郎、中村輝子

曲直瀬道三は漢方における後世派の先駆者として高く評価されている。彼が書き残した医書についての研究も多い。しかしながら、これまでの研究は彼の代表作『啓迪集』を中心としたものであり、彼の医学が確立する以前、すなわち、彼の前半期の医学についての研究はほとんど行われていない。

筆者らは道三の前半期の医学を研究する過程で、これまで注目されなかった道三の医書、『診脈口伝集』(内閣文庫所蔵)の中に、道三の医学、すなわち、「当流」に関する興味深い記述を見出した。本報ではこの記述を他の諸文献と比較することにより、道三の前半期における医学思想を明らかにしたい。なお、本報における道三の前半期とは足利学校時代から『医工指南篇』を著した年(一五六四年)までを指す。

一 内閣文庫所蔵『診脈口伝集』

『診脈口伝集』は脈に関する道三の医書として著名であるが、同名異書とみられる内閣文庫所蔵の同書の末尾付近には以下のような文章が記されている。¹⁾

①三皇、伏羲(八卦)、……神農(本草)、……黄帝(素問)、……巫彭、雷公、華佗……、扁鵲、……『医学源流』二如

此ノ名人數百人アリ、悉不攷記、②当流ニ用ルハ四先生トテ四人アリ。張仲景、外感ヲ主トス。劉河間、熱病ヲ治ス。李東垣、内傷ヲ療ス。朱丹溪、雜病ヲ得タリ、(朱丹溪)東垣カ弟子也。③当流ニ四先生用ル内ニ、東垣、丹溪ヲ本トス。東垣ハ潔古カ弟子也。丹溪ハ東垣カ弟子也、又、此内ニ丹溪ヲ本トス。日本道三丹溪流之。④武藏国ニ導道ト云人入唐シテ、丹溪ヲツタエテ帰朝シテ、道三是ニ有一伝也。道三初ハ三喜之弟子也。後ニ導道ノ弟子也。然ハ唐ヨリ嫡々相承也。⑤唐之熊宗立ト云人、諸ノ医書ノ注ヲセシメ、指出タリ。知恵アサシト之、当流ニハタツトマス、東垣、丹溪カ書ヲタツトム也。⑥翠竹院 一溪道三(『診脈口伝集』)

この文は大別して二つの重要な内容を含んでいる。その第一点は、道三が師、導道ならびに三喜から継承した医学(「当流」)の系譜について、第二点は、当流の医学思想に関してである。第一点については前報で検討したので、本報では第二点を中心に検討した。

二 『医説』および『診脈口伝集』における当流の意義

曲直瀬道三の前半期に書かれた医書には、しばしば「当流」という言葉が見出される。この言葉は本来は「当方の流派」、「我が流派」の意味であるが、固有名詞に近い言葉としても使われている。例えば、道三の晩年に重なる年代に生きた沢庵の『医説』では次のように説明している。

⑦中古に丹溪と云ふ名医生まれて、ことごとく心持を、うらおもてかへて、医道をひらきたるなり。其筋を、日本より一人の律師ありて(出家なり)渡唐して丹溪の流を伝へて帰る。足利の三帰、其流をうけて関東にばかりひろまりてあるべきを、古、道三一溪といひし人、関東へ下り、此流を伝へて上洛しけるが、三帰へ其筋道をばうけて聞けれども、三帰より物をひろくしり、知恵殊の外まさりたるにより、都にて様々の医書をつくり、日々談議講説をして、天下の者皆々あつまり聞き、弟子になりてより、医道はじめてひらけたる様に成り、日本国大かた皆、道三流に成りぬるなり、

是が当流なり、丹溪の流なり。(沢庵『医説』)

沢庵は道三の流派に属してはいないので、ここにおける「当流」は「我が流派」の意味ではない。このように道三の流派以外の人々の間にも、当流が道三流あるいは丹溪流を意味する固有名詞に近い言葉として知れ渡っていたことは、次の『涙墨紙』の序文からもわかる。

⑧ 導道……古河三喜……道三、是以世呼当流、而稱丹溪之流派(『涙墨紙』序)

道三自身の記述の中で、当流を説明した例はほとんど見ることができない。その中であって、本報のはじめに引用した『診脈口伝集』の①⑤⑥の文は短文ながら、道三自身が当流を説明したものととして注目に値する。『診脈口伝集』の記事を沢庵の『医説』の記事で補充しながら読むと、当流は以下のように要約される。

「中国医学の源流は、伏羲、神農、黄帝、扁鵲など数百人にのぼるが、我々の流派は張仲景、劉河間、李東垣、朱丹溪の四人の先生の説に基づく。ことに丹溪の説に基づく。武蔵国に導道という人がいて、中国へ行って丹溪の医学を学んで帰ってきた。三喜は導道の医学を学び、関東一円にこの医学を広めた。道三は初めに三喜について、次に導道に直接ついて、この医学を学び、これを日本全国に広めた。」

『診脈口伝集』の中で、道三が誇らしげに当流を主張している部分がある。それは④の最後の「唐ヨリ嫡々相承也」という表現である。この中に、自分達の流派は当時の中国で主流であった朱丹溪の医学をじかに学んできた、という強い自負が感じられる。当流の中で道三が最も強調したかったのはこの点にあったと推測される。

三 『医学源流』(熊宗立)の否定

道三は『診脈口伝集』の①と⑤において、熊宗立の『医学源流』を引用し、我々はこの医学を採用しない、と記している。

この記述を検討するに先立って、『医学源流』ならびにこれに関連した医書について概観しておきたい。

『医学源流』は単行もされているが、一般には『医書大全』(熊宗立編)のはじめに付録として載せられている。『医学源流』を含む『医書大全』は日本で最初の刊行図書として著名である。刊行は大永八年(一五二八年)であり、道三が足利学校に入った年にあたる。当時、本書は大変重宝がられ、流布した。また、『医書大全』の病の総論部を抄出した『医方大成論』が日本で作られ、これが江戸時代前半期における最大のベストセラーとなり、医界を風靡した。⁴⁾

このように後世にまで影響を与えた『医書大全』などを道三は何故に排除したのであろうか。その理由は引用文の①⑤に基づくと、次のようである。「『医書大全』は、伏羲、神農から朱丹溪に至る名医、数百人を医学の源流とし、これらの中から、有効な治療法を蒐集している(②)。このように編纂されたものは羅列的で浅薄である(⑤)「知恵浅シ」。当流はこのような医学体系を採用しない」。このような理由を述べる背景には、我が流派は朱丹溪を中軸とする体系だった医学である、という強い主張を読み取ることができる。

「当流は『医書大全』などを採用しない」という説の代表的な例をいくつか見ていきたい。

(i) 道三の代表作、『啓迪集』は六四種もの数多くの文献を引用しているにもかかわらず、この中に『医書大全』や『医方大成論』は含まれていない。この事実は、これらの医書を道三が意識的に排除したためとみられる。

(ii) 河内全節『日本医道沿革考』の中に、次の記事がみられる。⁵⁾

⑨後陽成帝ノ朝ニ至リ、曲直瀬正慶(道三)トイフ者出テ、金ノ李東垣ノ方法、及ビ元ノ朱丹溪ノ方法ヲ表準遵奉シ、其名声朝野ニ振ヒ、技術一世ヲ風靡ス、海内奉ジテ以テ師表トス、是ニ至テ、和氣丹波以下五典薬諸家ノ主張スル所ノ和剂局方、医方大成等ノ説、遂ニ衰廢シ、金元ノ医学盛ニ行ハル(河内全節『日本医道沿革考』)

この中で、特に注目されるのは、和氣や丹波などの典薬の諸家が主張する『和剂局方』や『医方大成論』の説が衰微し、金元の医学が行われた、との部分である。三喜や道三が新しい医学を興したのに伴って、それまでの局方派が衰退

した、という見解は一般に知られている。しかしながら、ここにあるように、『医方大成論』もこれに含まれるという説はあまり知られていない。『医書大全』の正式の名称は『名方類証医書大全』であり、その名の通り、古来からの名方を病名毎に編纂したものである。本書を『和剂局方』と比べるならば、ここでは宋代以後の名方を数多く収載している点は異なるものの、その編纂の基本的な姿勢は『和剂局方』と同様である。これらの医学では、病証に対する深い洞察がなく、病証に対して単に出来合いの処方しか配当しない。これに対して、道三が掲げた医学は「察証并治」の医学である。この立場では、『医書大全』は『和剂局方』と一緒に扱われる存在であつたとみられる。

四 『月湖抜粹医学迪蒙』における当流

『月湖抜粹医学迪蒙』(以下、『迪蒙』と略す)については前報⁽²⁾で概略を紹介したが、本書においても当流に関しての示唆に富む内容が記されている。当流に関連する記述を以下に示す。

⑩ 祖宗月湖先生ハ入唐ノ暇日、諸家ノ秘文ヲ撮テ、全九集要ヲ撰ス、尤モ当流之靈方也。……⑪ 其後ノ末孫、江春斎ハ接武(アトラツイデ)、和極集、脈伝、禁好集、能毒集、灸歌等ヲ撰シ、後人ヲ啓迪ス。⑫ 余、マタ、近来ノ書籍ヲ檢編セシメテ諸学蒙徒ヲ導ク故ニ号シテ抜粹医学迪蒙集ト曰ク。文章ハ古賢之語ニ随イ、薬名ハ月湖之秘伝ヲ著ス。⑬ 柴胡、常山ノ二味ハ他家之用薬ト当家ト甚シク異ナル也。後人ノ人、訂シテ之ヲ用イルハ幸ナランカ。⑭ 于時天文元曆仲冬初吉、三喜末孫、道喜序。(『迪蒙』序文)

前報⁽²⁾で明らかにした如く、『迪蒙』における月湖は導道、江春斎は三喜、道喜は道三を指す。したがって、ここに示されている学統、すなわち、月湖(導道)が中国から日本に医学を持ち帰り、江春斎(三喜)がこの医学を継承し、さらに道喜(道三)がこれを継承した、という系譜は、『診脈口伝集』でのべられている系譜と同じである。ことに、『迪蒙』では、導道(月湖)を「祖宗」とし、三喜(江春斎)ならびに道三(道喜)を「末孫」と記し、あたかも血縁関係があるか

のように表現している。このような表現は『診脈口伝集』にも見られ、ここでは「嫡々相承也」(嫡子より嫡子へと次々に家を継ぐこと)と記している(④)。これらの表現から、当流における継承の緊密さがうかがえよう。

『迪蒙』における当流についての記述の中で特に注目されるのは『全九集要』なる医書を「尤も当流の靈方也」として重視している点である。『全九集要』は今日残されていないが、『全九集要』に基づいて著されたとみられる『迪蒙』が現存の『全九集』に近いことから、『全九集要』は『全九集』のもとになった医書と推測される。『全九集』に関連する医書が当流で最も重視される所以は、これらが中国から持ち帰った、導道直伝の医書と目されるからに他ならない。⁽⁷⁾『全九集要』の代わりに、これを基盤にして著されたとみられる『迪蒙』の内容を検討してみたい。

『迪蒙』の各論には出典を附した引用文が多い。これらを頼りに引用医書の傾向を見ると、『丹溪心法』、『丹溪纂要』、『医学正伝』、『明医雜著』など、朱丹溪の医学を継承した医書が多いことがわかる。したがって、『迪蒙』は丹溪の流派に属する医書であるとみなすことができる。

『迪蒙』が『診脈口伝集』に記された当流の内容に近い医書であることは次の例からも理解される。本書には『医方大成論』からの次のような引用がみられる。

⑮ 大成等ニ五癩ヲワクルト云ヘドモ、丹溪ハ痰ト火トノ二ツ定テ治スル也

⑯ 夫大成等ニハ五疸ヲワカツト云ヘドモ丹溪ハ(コレ)等ヲワカタズ、皆湿熱トナス

⑰ 大成ニハ赤ハ熱、白ハ寒トアルハ甚誤也、赤白トモニ湿熱腸胃ニ怫鬱トシテ生ズト原病式ニ見タリ、……丹溪ガ云……皆湿熱ヲ本トストアリ

⑱ 大成ニハ五痺ヲ挙タリ、……丹溪ガ云フ手麻ハ氣虚也、手木ハ湿痰死血ナリ、十指ノ麻ハ胃中ニ痰アリト云ヘリ

これらの記述は、病を羅列的、表面的に扱った『医方大成論』の見方を否定し、病源まで溯って考えようとする丹溪の医学を推奨する形式をとっている。すなわち、これらの例は、「当流は熊宗立の『医学源流』を採用しない」という『診

脈口伝集』の立場を具体化したものとみなすことができよう。

五 錢塘月湖編纂『全九集』における当流

前節で『全九集』関連の医書が当流の最も基本的な医書と認められていたことを明らかにした。本節では、一般に知られている『全九集』について検討したい。

一般に『全九集』の原著者は「錢塘月湖」であるといわれているが、彼の経歴は不明で、その存在すら疑問視する人もいる。⁽⁸⁾ 彼が丹溪の医学を汲む人物であるという説もあるが、確証はない。『全九集』ならびに「錢塘月湖」については不可解な点があまりにも多く、これに関しては別報で検討する予定であるが、⁽⁷⁾ 『全九集』の内容は『迪蒙』と類似していることから、基本的には本書も『迪蒙』と同様、丹溪の医学に属する医書とみられる。

当流における『全九集』の意義を考える上で、本書が他に例を見ない特殊な構成をしている点が注目される。たとえば、巻之三の初めの四篇は次のように構成されている。⁽⁹⁾

①九 右拾箇条先欲入医学之門可明之者也

②〇 右八箇条診切之学将熟者可候焉

②一 右七箇条者診切之奥儀也

②二 右一十九箇条固医門之奥室秘中之秘成也

ここでは入門篇(①九)から奥儀篇(②一、②二)へと順次配列している。このような表現および構成から、本書は当流の印可書的な意味合いが強いことがうかがえる。⁽¹⁰⁾ 中国には丹溪の医学を継承した著名な医書が数多く存在する。それにもかかわらず、中国では全くといっていいほど知られていない『全九集』を重視した背景には、本書が当流の「秘す」べき性格を持った印可書であったことが認められる。

六 『切紙』における当流

『切紙』は、門人の才能に依じて、道三が当流の秘訣を自ら記して授与した断片（「切紙」）を編集したといわれている。一方、近年になって、『切紙』の原型とみられる『探蹟集』が発見され、『切紙』の本来の意義を考察することができるようになった。⁽¹¹⁾『探蹟集』が『切紙』と異なる点は、各篇の最後に、これが自分の師から受け継いだものであると述べた記事を残している点である。例えば次のようである。⁽¹²⁾

⑲ 直聴師君、尊講而私註藥劑（「当他之両例」）

⑳ 以師君之秘本写之畢（「三治授」）

㉑ 右以師君之秘本写之畢而聴明講遂一諾者也（「五矩」）

道三は師から受け継いだ医学を道三の弟子達に「切紙」として与えた。このことは、「切紙」は当流を継承する者に与える印可状に近いものであったと考えることができよう。⁽¹³⁾このように「切紙」を理解すると、『切紙』の中に「当流」の用例が多いこともうなずける。『探蹟集』は永禄二年（一五五九年）に著されており、道三の前半期における「当流」の内容を知るのに恰好な資料といえる。『切紙』の中にみられる当流のいくつかの例を示す。⁽¹⁴⁾

㉒ 「凡七事之弁剂者当流調合奥儀」〔七事は「五蔵寒熱両治弁剂」「三焦流通気血弁剂」「表裏散攻軽重弁剂」「十二引経弁剂」「三焦燥潤軽重弁剂」「三停風証駆邪弁剂」「患後様養前後弁剂」を指す〕（「切紙」）

㉓ 当流、朮、茯苓、縮、乾姜、藿、木香之類不用之（「切紙」）

㉔ 諸疾皆因陰陽偏勝、其治不過守中、是当流之奥儀也（「切紙」）

㉕ 庸医悉重貴藥、輕賤味、当流不然、以中病貴之、以不中病賤之（「切紙」）

㉖ 制方法当流不做東垣二十余味之類……（「切紙」）

②⑥では、当流は五臟、三焦、寒熱、表裏などにより、察証弁治する流派と記している。

②⑦では、丹溪が『局方發揮』などで強く弊害を主張している「辛香燥熱の劑」（ここでは乾姜、藿香、木香）を当流は用いないとしている。

②⑧、②⑨の例は「中」を重視した理論である。この説は胃氣の脈（中脈）を重視した李東垣、ならびに腎精を重視した朱丹溪の説に由来している。

③⑩においては、当流では東垣の多味の処方採用せず、丹溪の薬味の少ない処方を採用すると述べている。

以上に示した『切紙』中の当流の用例は、本報のはじめに引用した『診脈口伝集』の説、「当流は東垣、丹溪の二先生を重視し、ことに丹溪の説に基づく③」という記述に合致している。

七 曲直瀨一溪道三

曲直瀨一溪道三という名の意味について、これまでいくつかの説が提出されている。ただし、これらは、「曲直瀨」、「一溪」、「道三」の各々に関するものであり、これらを相互に関連付けたものではない。¹⁵ 著者らは前報で明らかにしてきた導道・三喜別人説、ならびに、本報でとりあげた当流の意義から、曲直瀨、一溪、道三の各々の意味を相互に関連付けて以下のように考察することができた。

曲直瀨の意味については、すでに真柳誠氏が興味深い知見を報告している。¹⁶ すなわち、『書経』洪範篇に「木（東に相当する）は曲直」とあるところから、曲直瀨は「東方（日本）の瀨（流れ）」の意味であろうと推定している。著者らも次の理由により真柳氏の説に賛同したい。すなわち、曲直瀨は丹溪に源をもつ中国医学の日本における支流の意味である。

曲直瀨の意味を以上のように解釈すると、次の「一溪」、「道三」も容易に理解することができる。すなわち、「一溪」は丹溪に源をもつ中国における一本の谷川、「道三」は導道、三喜、道三の三者によって開拓された日本における当流の

伝播路、と解される⁽¹⁷⁾。

なお、曲直瀬道三の姓名の意味と関連して、道三の『切紙』の最後に記されている署名の一部についてふれておきたい。一例を挙げると次のようである。

③ 于時日東元龜第四癸酉年上元日洛下雖知苦齋盍静翁道三(『切紙』)

この文中の「時、日東(日本)の〴年」という表現に注目したい。このような表現は中国と日本の関係を強く意識したものであり、前述した曲直瀬の意味に呼応している。

本節で明らかにしたように、道三は自分の名前を作ってしまうほどに、当流に対する思い入れが強かった、と著者は推定している。

八 導道、三喜における当流

道三が特別な意味を込めて当流という言葉を用いたことを前節までに明らかにした。このような特殊な当流の見方が道三の師である導道や三喜において、すでに見られるのであろうか。この問題を検討しておく必要がある。

導道が特殊な当流という言葉を用いたか否かは、彼が著したといわれる医書が今日残されていないので、これを直接に確かめることはできない。導道の口訣集とでもいうべき『老師雑話記』が今日に残されているが、これには道三の見方が濃厚に反映されているため、導道の説を正確に読み取ることができない。導道の医学を考えるに際して役立つのは、『当流医学之源委』における次のような記事であろう。

⑳ (享祿四年) 初遇於導道而即習素問、読微義、明於古来諸論諸方之可否也。伝受於用藥百二十種之効能

ここには道三が導道から『素問』や『玉機微義』を教わったことが記されている。『玉機微義』は『啓迪集』でもしばしば引用されているように、道三が重視した医書であるが、本書はあくまで「黄帝内経の経旨に基づいて、古今の医書

の源泉を探り、劉完素、李東垣、朱丹溪らの論集の要点を折衷した⁽¹⁸⁾「医書である。これらのことを考え合わせるならば、導道の医学は『玉機微義』に近いものであったと推定される。

次に三喜の当流の用例を検討したい。

③「ソモソモ当流ハ旧方ヲ捨テ、圓〔マドカ〕ニ心色本分ヲ觀ジテ、猶己心ヲ得道ノ窓ニ残ス。各々以心伝心ノ工、朝ナタナニ五劑三顆水ヲ湛ヘテ随縁応現ノ満月ヲ浮ブベシ。コレヲ把エル者ハ己心一具ノ脈証ノ掌〔ココロ〕タリ〔酬医頓得〕」

④「氣滯ハ痛ヲワタス之、夫当流ニハ血〔食の誤〕塊ハナシ。皆氣結、痰、血ノ塊之〔大成捷徑度印可集〕」

③では「当流は旧方を捨て」とあるところから、ここでの当流は伝統的な処方是否定した自分流の医学であることがわかる。ことに、『酬医頓得』にみられる医学は三喜特有の仏教医学であり、丹溪の医学ではない。⁽²⁰⁾④では、丹溪流の医学の中にみられる「三塊〔血塊、痰飲、食積〕の弁」を否定し、「氣結、痰飲、血塊」の三塊論を展開している。したがって、ここにおける「当流」は丹溪流ではなく、自分流の意味であることがわかる。

三喜の医学には丹溪の説もみられるが、「当流」の用例に限定するならば、引用文の③、④のごとく、三喜流の意味と解釈すべきである。

以上、本節では導道と三喜における「当流」の意義を概観してきた。この結果、道三が主張する「当流」は師から受け継いだものではなく、道三が創り出したものであることが明らかになった。

九 当流の変遷

道三の数多くの医書を通覧すると、当流の用例は道三の前半期の医書に多く記され、後半期のものには殆ど見られないことがわかる。この変化は、後半期には道三独特の医学体系が確立し、中国から直輸入した医学という特徴を敢えて

持ち出す必要がなくなったことと関連していると推測される。

③五腎弁、外感法仲景、内傷法東垣、熱病用河間、雜病用丹溪、一以貫之帰於内経、此医道之大全也。(『全九集』卷三)
 ②当流二用ルハ四先生トテ四人アリ、張仲景外感ヲ主トス。劉河間熱病ヲ治ス、李東垣内傷ヲ療ス。朱丹溪雜病ヲ得タリ。……当流二四先生用ル内ニ、東垣、丹溪ヲ本トス。……又、此内二丹溪ヲ本トス(『診脈口伝集』)

③一家ニ偏執スレバ其ノ学大全スルコト能ワザル也。……外感ハ仲景ニ法ル。内傷ハ東垣ニ法ル。熱病ハ河間ニ法ル。雜病ハ丹溪ニ法ル。(『医工指南篇』²¹)

これら三つの引用文は、張仲景、劉河間、李東垣、朱丹溪の四先生に関する説では類似しているが、主張したい点は異なっている。

③(『全九集』)では、四先生は各々に得意の分野をもつものの、その根底は黄帝内経の一貫した理論で貫かれている、と記している。ちなみに、四先生について記述した部分は王綸の『明医雜著』に由来している。ここに述べられた黄帝内経の経旨に基づく医論は前述のように導道の基本的な立場であり、ごく初期の道三の医学はこの立場を採っていたと推定される。

道三の医学全般を見渡すと、『素問』の存在は軽微である。すなわち、『啓迪集』をはじめとする道三の多くの医書では、『素問』、『靈枢』からの引用が極めて少ない。これに対して、当流の当初の医書である『全九集』において、『素問』、『靈枢』からの引用が多い点は注目に値する。このことから、当流のごく初期には黄帝内経の医学が重視されていたことがうかがえる。

引用文②は本報で明らかにしてきた当流の見方を述べている。ここでは内経医学の一貫した立場は影が薄れ、丹溪の医学に集約しようとしていることがわかる。

道三の『医工指南篇』(一五六四年)にみられる③は、『明医雜著』から四人の先生のことを引用しながらも、「一家に偏

執してはならない」という立場で記されている。『医工指南篇』（『十五指南篇』に同じ）は道三流の病理観や治療方針が体系だつて記されているところから、この書を以つて道三の医学の確立とみなすことができる。²⁰ また、本書は道三の医学の前半期（確立するまでの時期）と後半期（確立後の時期）を分ける指標になる、と著者らは考えている。

道三の代表作『啓迪集』は彼の後半期に著されたものであり、六四種もの医書を用いて編纂されており、この書には、「一家に偏執しない」とする『医工指南篇』の姿勢が継承されている。

これまで、道三の医学といえ、一家に偏執しない後半期にみられた姿勢のみが注目されてきた。しかしながら、前半期の道三は自分の名前を作つてしまふほどに、丹溪の医学に固執していたことを見逃してはならない。

謝 辞

曲直瀬道三、田代三喜に関する諸文献をご教示頂いた北里研究所・東洋医学総合研究所の小曾戸洋先生、真柳誠先生、京都府立医科大学の新村拓先生、京都大学の松田清先生、元塩野義製薬株式会社の桜井謙介先生に感謝します。また、諸文献の閲覧の御許可を頂いた武田科学振興財団杏雨書屋、京都大学医学部図書館に感謝します。

〔附記〕 当流授受截紙

道三は弟子の才能に応じて当流の秘訣を「切紙」として与えた。これが当流の印可的な役割を持つていたことは本稿で論じた。切紙については一般によく知られているが、当流の印可書的な目的で道三が自分の著した医書の抜粋を「截紙（キリガミ）」として弟子に与えていたことはほとんど知られていない。

道三が足利学校時代から七十六才（一五八二年）の老年に至るまでに与えた截紙を「当流授受截紙（截紙四十通を含む）」として『当流医学之源委』の中で記している。以下に補足しながら転載した。なお、この記事は当流の「截紙」の実体を明らかにするばかりでなく、道三が自分で著した医書をどのように位置付けていたか、たとえば、初学者向きのものか、当流の奥儀に

近いものか、等を知る上でも重要な意味を持っている。

对学侶宜使授与之次序

- ①先截紙之初、十『美濃医書（『捷徑弁治集』、『愚撰脈書』）
- ②次截紙之中、上十五『十五卷（医工指南篇）』、『仮全九（仮名本全九集）』、『聖功方（授蒙聖功方）』
- ③次截紙之中、下三十『真全九（真名本全九集）』、『能毒本草（日用薬性能毒？）』、『須慎類（須慎類五法）』
- ④次截紙之奥端、三十五『藍墨（医燈藍墨）』、『宜禁本草』、『神術類（試験神術類五百三十四法）』
- ⑤次截紙之奥、四十『雲陣夜話』、『可有録』、『針灸経（針灸集要）』
- ⑥次截紙之外『茶話（八十一ヶ条茶話）』、『山居（山居四要抜粹）』、『炮灸論』、『針灸禁穴解（禁灸禁針穴解并仰伏同身寸法）』
- ⑦次『三家流（三家者流明説）』、『三国医源』、『針治聖伝（針治聖法之直伝）』
- ⑧次『大徳濟陰秘訣（大徳濟陰方？）』、『雞旦祝酒三葉式』
- ⑨大略熟学而察彼心底慎勤須授与『啓迪集』者也。

文献および注

- (1) 内閣文庫所蔵（一九五一六〇）『診脈口伝集』
- (2) 遠藤、中村「導道、三喜別人説の検討」『日本医史学雑誌』四四巻四号、四八一～四九八頁、一九九八年（平成十年）
- (3) 道三とほぼ同時代の劍客、塚原卜伝（一四八九～一五七二）は自分の起した型を当流と呼んだ。これが固有名詞化され、「新当流」と呼ばれるようになったといわれている。道三の「当流」もこれに近い使われ方と推測される。
- (4) 小曾戸洋「名方類証医書大全解題」『医書大全、医方大成論』（漢籍医書集成、七）、エンタプライズ、一九八九（平成一年）
- (5) 河内全節『日本医道沿革考』第九沿革、二九〇～三〇頁、敬業館蔵版、一八八五（明治十八年）
- (6) 京都大学富士川文庫所蔵（イ・27）『月湖抜粹医学迪蒙』
- (7) 導道が『全九集』を持ち帰ったという構図は道三による作爲であると推定される。詳細は、遠藤、中村「月湖編纂全九

- 集の諸問題』『漢方の臨床』四五巻二一〇、三五〇、四六頁、一九九八(平成十年)
- (8) 小曾戸洋著『中国医学古典と日本』二五頁、塙書房、東京、一九九六(平成八年)
- (9) 月湖編『類証弁異全九集』(京都大学富士川文庫)
- (10) 遠藤、中村「全九集の編纂者とその意図」『日本医史学雑誌』四四巻二二〇、二二一頁、一九九八(平成十年)
- (11) 松田清「新出の曲直瀬道三医書」『漢方の臨床』四二巻四号、四一〇頁、一九九五(平成七年)
- (12) 松田清氏が大分県白杵図書館で撮影された写真に依った。
- (13) 遠藤、中村「曲直瀬道三著『切紙』の再検討」『漢方の臨床』四五巻九号、一〇〇、一〇一頁、一九九八(平成十年)
- (14) 大塚敬節、矢数道明編『近世漢方医学書集成、四、曲直瀬道三』名著出版、東京、一九七九(昭和五十四年)
- (15) 矢数道明『近世漢方医学史』、名著出版、東京、一九八二(昭和五十七年)
- (16) 真柳誠、矢数道明「曲直瀬姓の由来」『日本東洋医学雑誌』四二巻一号、九三頁、一九九一(平成三年)
- (17) 道三は自らの名の由来を「我れ山東に往来するに、東海道、東山道、北陸道の三道による、故に称す」と解説している。道三は時代によって異なつた解説をすることを考え合わせれば、この解説は原義ではないとみるのが妥当であろう。
- (18) 『玉機微義』序文
- (19) 大塚敬節・矢数道明編集『近世漢方医学書集成、一、田代三喜』、名著出版、東京、一九七九(昭和五十四年)
- (20) 遠藤、中村、梁、奈倉「『酬医頓得』に見られる田代三喜の医説(一)」『日本医史学雑誌』四四巻一号、七三〇、七三九頁、一九九八(平成十年)
- (21) 曲直瀬正盛(二溪、道三)著『医工指南篇』(杏雨書屋)
- (22) 『医工指南篇』は『医学指南篇』あるいは『十五指南篇』ともいわれる。元亀二年(一五七二)の成立といわれているが、『当流医学之源委』の記述に基づけば、永禄七年(一五六四年)まで遡ることができる。本書の著者は一般に言われているような曲直瀬玄朔ではなく、初代道三によるものである、とのご教示を小曾戸洋先生から頂いた。御礼申し上げます。
- (東京理科大学薬学部)

Medical Thought of Dosan Manase's (曲直瀬道三) Early Years (I)

—The Meaning of the Word, “Toryu (当流)”—

by Jiro ENDO and Teruko NAKAMURA

Dosan Manase was a famous Japanese doctor in the Muromachi era and was in the vanguard of the Goseiha school of Sino-Japanese traditional medicine. In his “Shinmyakukudenshu (『診脈口伝集』)” we found an interesting account to explain the meaning of the word “Toryu”, which was often found in the medical books written in Dosan’s early years. This word signifies “our school” in a general sense, but in this book Dosan used it with the additional meaning of his medical thought originating in *Zhu dan xi* (朱丹溪) who was a famous Chinese doctor in the Yuan age. In addition, he mentioned in the same book that Toryu was introduced from China into Japan by Dodo (導道), succeeded by Sanki (三喜) and propagated by himself.

Moreover our extensive investigation of other medical literature showed that Dosan, in his early years, tried to develop a system of medical thought on the basis of that of *Zhu dan xi*. This is worthy of note because it differs considerably from the stance adopted in Dosan’s later years: while he valued *Zhu dan xi*, he referred to many medical books by various authors, and tried not to favour any particular school.